空也誄の「湯島」と梁塵秘抄の「補陀落」

神野富一

一

源為憲の空也誄（序）に次の一節がある。

阿波土佐両州海中有湯島矣。地勢霊奇、天然幽邃。人伝有観世音菩薩像、霊験掲焉。上人為値観音、故詣彼島。六時恭敬、数月練行、終無所見。爰絶粒向像、腕上焼香、一七日夜、不動不眠。最後之夜、所向尊像、放微妙光。瞑目則見、不瞑無見。於是焼香之腕、燋痕猶遺。

（阿波土佐両州の海中に湯島有り。地勢霊奇にして、天然幽邃なり。人伝ふるに観世音菩薩像有りて、霊験掲焉なり。上人観音に値はむが為、故に彼の島に詣づ。六時恭敬、数月練行するも、終に見る所無し。爰に粒を絶ち像に向かひ、腕上に香を焼き、一七日夜、動かず眠らず。最後の夜、向かふ所の尊像、微妙の光を放てり。目を瞑づれば則ち見え、瞑ちざれば見ること無し。是に於て香を焼ける腕、燋痕猶遺れり。[1]）

空也上人が、観音に値うために「阿波土佐両州の海中」にある「湯島」という所へ出かけ、苦行を行った末についに観音の姿を見ることができたという。空也誄のなかで、この部分は、「春秋二十有余にして尾張の国の国分寺に於て髫髮を剃落」した記事、次いで播磨国揖保郡の峰合寺で一切経論を数年間披閲したという記事に続いているので、まだ空也の二十歳代、修行時代の事跡を記したものと思われる。観音を見るための行をし

たというのは、浄土経典の一、観無量寿経にみえる定善観のうちの第十観、観音観を修したということでもあろうか。空也誄の「目を瞑づれば則ち見え、瞑ぢざれば見ること無し」という表現は、観無量寿経の定善観を説く部分に三カ所みえる「目を閉づるも目を開きても」という表現と通う。

さて空也誄のこの個所は、慶滋保胤の日本往生極楽記（九八三～九八五成立）にも、

阿波土佐両州之間有レ島、曰二湯島一矣。人伝有二観音像一、霊験掲焉。上人腕上焼レ香、一七日夜、不レ動不レ眠。尊像新放二光明一、閉レ目則見。（日本思想大系『往生伝　法華験記』）

とある。空也誄からの抄出というべきであろう。そしてこれら空也誄や日本往生極楽記を直接間接の源として、後世の史書や僧伝にもこの空也の湯島訪問の条は次のようにつづられている。

・皇円・扶桑略記巻二十六（一〇九四～一一〇七年成立）

阿波土佐両州之間有レ島、曰二湯島一矣。人伝有二観音像一、霊験掲焉。上人腕上焼レ香、一七日夜、不レ動不レ眠。尊像新放二光明一、閉レ目則見。（新訂増補国史大系巻十二）

・承澄・阿娑縛抄（明匠等略伝日本下）（一二四二～一二七九年成立）

阿波土佐両州海中有二陽島一矣。地勢霊奇、天然幽邃。人伝有二観世音菩薩像一、霊験掲焉。上人為レ値二観音一、故詣二彼島一。六時発敬、数月練行、終無レ所レ見。爰絶レ粒向レ像、腕上焼レ香、一七日夜、不レ動不レ眠。最後之夜、所レ向尊像、放二微妙光一。瞑レ目則見、不レ瞑無レ見。於レ是焼香之腕、焦痕猶遺。（大日本仏教全書巻六十）

・虎関師練・元亨釈書巻十四（一三三二年成立）

阿州海中有レ島、曰二湯島一。観自在感応之地也。也焚二香臂上一、七日夜、不レ動不レ睡、願レ見二大悲真身一、其像放レ光。（新訂増補国史大系巻三十一）

・高泉・東国高僧伝巻五（一六八七年成立）

阿州海中有レ山、号二湯島一。観音顕蹟之地也。勝煉二臂香一、七日夜、願レ見二大士真身一、像忽放レ光。（大日本仏教全書巻六十二）

・師蛮・本朝高僧伝巻六十四（一七〇二年成立）

阿州海中有二湯島山一。観音顕蹟之地。願レ見二真身一、勝煉二臂香一、七日夜、大士放レ光。（大日本仏教全書巻六十三）

ところで空也誄は、誄というものの性質およびその内容から空也没（九七二年）後、その一周忌に書かれたものかといわれ

ている。[2] 著者源為憲（九三五年前後の生まれか）[3] は、文人貴族であったが三宝絵詞の著者でもあって仏教への関心を示し、空也の生前の活動、ことに天慶元年（九三八）以降のその後半生の京都市中における布教活動については、同時代人として関心をはらっていたはずである。誄の著作動機について、空也誄自体にも、

　肆或尋遺弟子於本寺、又集先後所修法会願文、所唱善知識文数十枚、以知平生之蓄懐焉。不堪称歎、而為之誄。

（肆に或ひは遺弟子を本寺に尋ね、又先後の法会を修する所の願文、善知識を唱ふ所の文数十枚を集め、以て平生之蓄懐を知る。称歎に堪へずして、之が誄を為る）

とある。その為憲よりも熱心な念仏信者で、念仏結社勧学会の活動を通じて空也自身にも親近していたと推測される慶滋保胤[4]も、日本往生極楽記に空也伝を残している。こうして同時代の空也に近しい人々によって空也伝が書かれているとすれば、空也の湯島訪問のことも、たんなる伝承とはみられない。現実に空也が湯島という島を訪ずれ、修行をしたということがあったのだろう。

二

　その「阿波土佐両州の海中」にある「湯島」について、従来、阿波志およびそれを引く大日本地名辞書を除いて、それをどこと特定するものをみない。ほぼ所在未詳あつかいである。[5] しかし、その「湯島」とは、阿波志や大日本地名辞書説のとおり、紀伊水道にある伊島（徳島県阿南市伊島町。略図1参照）であること、ほぼ断定できる。その理由は、いくつかある。

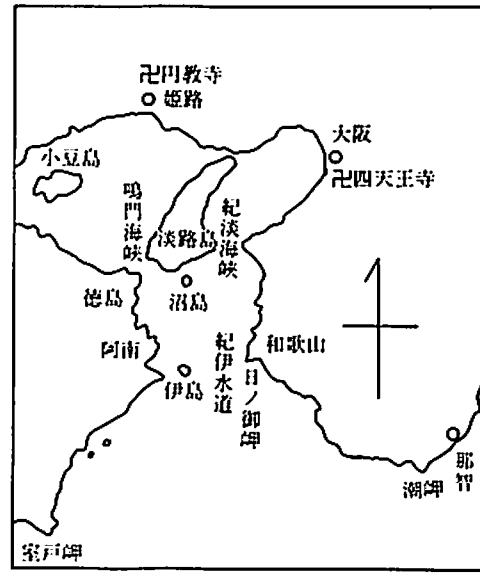
一、伊島は阿波の東海上にあって地理上の位置が適当で、しかも空也誄の「地勢霊奇、天然幽邃」の形容にふさわしい自然をもつこと。

　阿波の東海上にあるという点は、空也誄の「阿波土佐両州の海中」、日本往生極楽記の「阿波土佐両州の間」とはやや位置を異にするようだが、元亨釈書以降では「阿州の海中」とされることに留意したい。空也誄や日本往生極楽記では不正確であった「湯島」の位置の記述が、後世訂されたとみられる。また伊島は、面積約三平方キロ（人口は現在約三百）の小島であるが、平地は乏しく崖や岩場に富んで、近代に入っても修験者の行場ともなっていた。

二、伊島は、古名を湯島といったこと。

古い文献で確認できるわけではないが、阿波志巻十一（一八一六年成立）に、

伊島　或は湯島と称す。南海中に在り。椿泊を距る三里、其間乱礁あり、雁南の如し。舟行甚だ懼畏す。其頂は卒都婆崖と称す。大悲閣あり。其像旧樟木の穴中に在り。宝暦中森氏閣を作り、之を安ず。三十三編なる者、土人置く所。昔、釈光勝来遊す。国初獲する所の韓人を放つ。其裔今分れて四十八戸となる。血柏多し。（佐野之憲稿・笠井藍水訳「阿波誌」による）



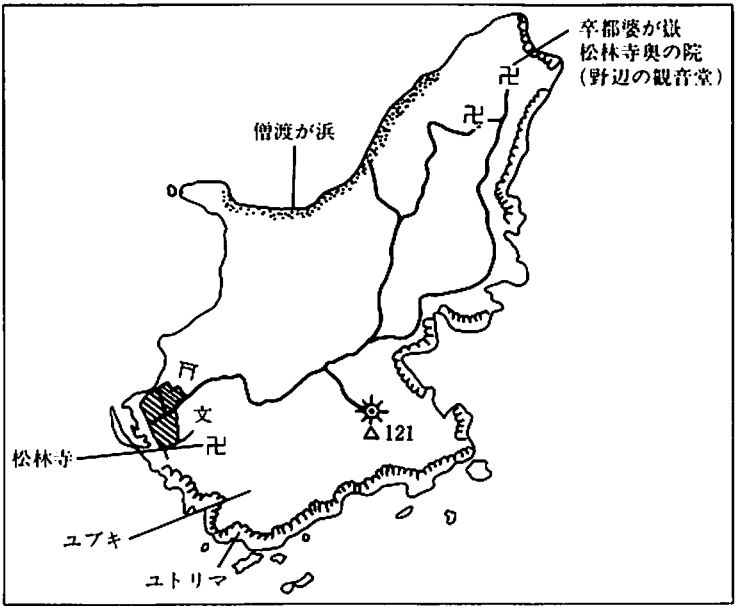
略図1　伊島の位置

とある。現在伊島でも、古名を湯島と伝えている。また、伊島では、昔湯が涌きだしていたことを伝え、その場所の名としてユトリマ（湯を汲んだ所の意か）およびユブキ（湯吹き）の地名が残っている。

三、伊島には空也の来島伝承があり、また空也が刻んだと伝える十一面観音を寺の本尊として、それを中心とする観音信仰が盛んであること。

伊島は三島よりなるが、唯一集落のある本島の、北端部の卒都婆が嶽と呼ばれる山の頂きに松林寺奥の院（野辺の観音堂ともいう）があって、観音を祀っている。先の阿波志にも、「其頂は卒都婆崖と称す。大悲閣あり。其像旧樟木の穴中に在り。宝暦中森氏閣を作り、之を安ず」とされた観音堂である。空也の開基と伝えている。その堂宇の背後の崖の上には空也の「行場跡」とされる岩場がある。また、本島の西部には「僧渡が浜」があって、空也上陸の地という。さらに、本島南西部の集落のそばにある松林寺の本尊が、空也の手になるという十一面観音像で、秘仏としてふだんは厨子に納められ、毎年新暦八月十七日にのみ御開帳の仏事がある。昔は、この観音像は卒都婆

が嶽の奥の院に祀ってあったが、ある時他所者の盗難に遭いかけて以来、松林寺本坊の方へ移し、奥の院の方へは新しい観音像を祀ったのだという（以上、略図2参照）。



略図2　伊島本島

文献では、阿波志に「昔、釈光勝来遊す」とある。光勝は空也のこと。また松林寺に、明治二十一年に神原万蕉なる人が、当時の住職とおぼしき徳信上人という人の需めに応じて作ったと奥書きのある巻子一巻が伝わっている。この文書は、毎年八月十七日の観音の祭礼日に参集の島民の前で住職が読み聴かせる習いで、従って現在の伊島における空也来島伝承はこの文書をもととしている部分が大きいと考えられ、実際島民の語る空也伝承の内容は、この文書の内容と変わらない。次に、その全文を書き写す（適当に改行し、句読点を補う）。

抑、檀上ニ安置シ奉ル所ノ本尊十一面観世音菩薩ノ由来ヲ尋ネ奉ルニ、人皇五十四代仁明天皇ノ高孫常康親王ノ御子、延喜二十二年、尾州国分寺ニ於テ剃髪シ玉ヒ、年ヲ経テ天台山ニ登リ玉ヒ、時ノ坐主延昌上人ニ随従アッテ大僧トナリ玉ヒ、御名ヲ光勝ト呼ヒ奉ル。其後自ラ空也ト改メラレ、又朝廷ヨリ上人号ヲ賜ル。

常ニ法華経ヲ読誦シ玉ヒ、弥陀観音ニ仏ヲ尊崇シ玉ヒ、平常念仏ノ功徳広大無辺ニシテ其利益ヲ説テ諸人ヲ教化シ、（ママ）時ニ天暦五年ニ当リテ、京洛中悪病流行シ、人民死亡スルコト無数ナリケレバ、上人是レヲ憐ミ、十一面観世音ノ尊

像ヲ刻マセラレ、此病患ヲ救ハセ玉ヘト一七日ノ間御祈念アリシニ、忽チニ洛中ノ諸人苦悩ヲ免レケル。

同六年ノ春、上人播州揖保郡峰合寺ニマシマシテ一切経ヲ読玉フ。アル夜ノ夢ニ金人来リテ上人ニ告テ宣ク、阿波ノ国那賀郡蒼海ノ中ニ一ツノ島アリ、名ヲ伊島ト云フ。汝早ク彼地ニ至ラハ、正ニ是レ莫大ノ利益ヲ蒙ルベシ、トノ告ニヨリ、上人此島ニ来リ玉ヒ、夫ヨリ七日ノ間勤セス不眠ノ行法ヲ修セラレケル。七日満スルノ晩、五色ノ雲東方ヨリタナヒキ、金色ノ光ヲ放テ恰モ日月ノ如ク、異香芬々タリ。不思議ナル哉、空中ニ十一面観世音菩薩、无量ノ諸菩薩ニ左右ヲ囲繞セラレテ忽然ト出現シ玉フテ、上人ニ告テ宣ク、善哉善哉、汝末世ノ衆生ヲ済度セント思フ。方ニ今ナリ、我真像ヲ永ク此霊地ニ留メヨ、ト告ケ玉フ。此時上人即坐ヨリ起テ合掌シ玉ヒ、夫ヨリ赤栴檀ノ香木ヲ持テ一刀三札ノ尊容ヲ彫刻シ玉フナリ。又香木ノ余ヲ以テ十方ノ諸仏ノ尊体、卒都婆一基ヲ建立アリケルカ、是レヨリシテ今ニ卒都婆嶽ノ名ヲ伝ヘケル。末世ノ衆生ヲシテ現当二世安楽ノ善因縁ヲ結ハシメンカ為ニ、此所ニ坊舎一宇ヲ建立アラセラレ、霊験アラタカナル尊像ナレバ、各謹テ拝礼スベシ云々。

明治二十一年歳次戊子五月七日応徳信上人需　　神原万薫沐拝書

文章のとくに前半は元亨釈書や本朝高僧伝の影響が認められるが、後半は空也来島のことを迫真的に記し、また観音像や寺の縁起を記して、島での伝承がもとになっていると思われる。

四、地理上適当で、しかも空也来島伝承や観音信仰をもつ島が他にないこと。

「阿波土佐両州の海中」付近には、出羽島や大島という小島、また竹ケ島・二子島・葛島などのさらに小さな島々が存在するが、いずれも空也来島伝承もなく、観音信仰が盛んというわけでもない。

このような理由で、空也誅の「湯島」は現在の伊島であるとほぼ断定できる。

三

空也誅に、「湯島」は人も知る、霊験あらたかなる観世音菩薩像を祀る島として描かれている。また空也は苦行の末、そこでその尊像が何ともいえぬ霊妙な光を放ったのを見、観音に値うことができた。元亨釈書では「観自在感応の地」、東国高僧

伝・本朝高僧伝では「観音顕蹟の地」という。「感応」も「顕蹟」もここでは観音が衆生の願いに応じて出現することを意味しよう。こうした観音が出現する霊地とは、一面、観音の浄土、補陀落と同一視せられることがあったのではないか。

補陀落は、華厳経入法界品などに観世音菩薩の住する、南インドの山の名とされる。旧訳華厳経（巻五十一）では「光明山」という名の山とみえるが、法蔵の華厳経探玄記（巻十九）には「光明山」の本の名が「逋多羅山」であったとする。新訳華厳経（巻六十八）には「補怛洛迦山」、玄奘の大唐西域記の巻十秣羅矩吒国の条にも「布呾洛迦山」とみえる。観音浄土としての補陀落の観念は、これらの書物などによってすでに奈良時代には伝えられ、その浄土変もすでに伝わっていた。そして、平安初期以降、浄土信仰の発展とともに、観音浄土たる補陀落にも強い関心が寄せられるようになる。

空也誄にも、補陀落についての記事が二カ所みえる。

天慶七年夏、唱善知識、図絵一幀観音卅三身、阿弥陀浄土変一鋪、補陀落山浄土一鋪、荘厳成供養畢。

（天慶七年の夏、善知識を唱ひ、一幀の観音卅三身、阿弥陀浄土変一鋪、補陀落山浄土一鋪を図絵し、荘厳成り供養畢りぬ）

上人答曰、尺迦在霊鷲山、観音住補陀落。仏之機縁、地之相応、自昔而在。

（上人答へて曰く、尺迦は霊鷲山にあり、観音は補陀落に住す。仏の機縁、地の相応、昔より在り）

もって空也が、生前観音の補陀落に強い関心を寄せていたことが知られる。さらに、空也開基の寺、京都東山の六波羅蜜寺は十一面観音を本尊とし（元亨釈書空也伝以下）、山号を補陀落山という。空也の事跡をたどるとき、熱烈な念仏による民衆への布教とともに観音への帰依またその浄土への渇仰が彼の信仰生活を貫いていることが知られるのである。空也の時代、やや後の今昔物語集などによっても知られる通り、観音信仰は民衆の世界でもまた盛んなのであった。[6]

こうしてみてくると、空也およびその時代の人々が、南海の孤島の観音霊験の地、「湯島」を補陀落そのものとみなすことがあったのではないかと考えられてくる。そこが観音の住所、一つの補陀落とみなされていたからこそ、空也はそこに出かけ、観音に値うことができたわけではないか。空也作と伝える伊島の観音も十一面の像で、それを安置する松林寺の山号をやはり補陀落山という。

そこで気になるのが、次の梁塵秘抄の一首である。

四

梁塵秘抄巻二、四句神歌のうちの一首、

淡路はあな尊　北には播磨の書写をまもらへて
西には文殊師利　南は南海補陀落の山に対ひたり
東は難波の天王寺に　舎利まだおはします　（三一五）

淡路島を、四方に霊地の存することによって尊いと讃えている。その四方のうち、北の「播磨の書写」と東の「難波の天王寺（四天王寺）」についてはその所在ははっきりしている。ところが、西の「文殊師利」と南の「南海補陀落の山」がそれぞれどこをさすのかについては諸説あって定まらない。

まず、「西には文殊師利」のさす所については、讃岐の獅峰（『梁塵秘抄評釈』）、土佐の五台山竹林寺（『梁塵秘抄評釈』、新日本古典文学大系本）、豊後の文殊山寺（日本古典文学大系本）、中国山西省の五台山（新潮日本古典集成本）などの各説があるが、不明とするもの（「折口信夫全集ノート編第十八巻」、日本古典文学全集本）もある。これらのうち、荒井源司『梁塵秘抄評釈』の讃岐の獅峰説は、中山城山の全讃史（文政十一年序）に次の如くあるのを根拠とする。

夫屏風浦之為レ地也、右有二象山一。（大麻山也）左有二獅峰一。（大麻山也）後有五岳。（一曰香倉山、二曰鳥山、三曰我拝山、四曰仲山、五曰火上山）五岳則五智如来也。獅子則文殊。而象則普賢也。従二割判一已有二如レ此因一。是以弘法大師降誕。而為二密教弘通之祖一矣。（巻八「仏廟志下」、「普通寺」の項。『標註訓点全讃史』による）

弘法大師降誕の地とされる普通寺寺域の左右や背後に位置する山々を如来・菩薩の顕現とみなし、その一翼をになう獅峰（天霧山、標高三百六十メートル。あるいはここは、その天霧山に連なる弥谷（いやだに）山、標高三百八十二メートルをも含んだ称か）を文殊菩薩とするのであるが、この伝承を讃岐の郷土資料も含めて他の文献にたしかめることは今のところできていない。すなわち、この獅峰が梁塵秘抄に歌われるほどその当時に著名であったのかどうかは疑わしい。他の説も根拠が定かではなく、結局「西には文殊師利」のさす所は不明であるというほかはない。

次に「南は南海補陀落の山」のさす所については、「紀伊国東牟婁郡の補陀落山」（日本古典全書本）、観音菩薩垂迹の地としての紀伊の熊野三山（『梁塵秘抄評釈』、日本古典文学全集本）、那智山（新日本古典文学大系本）、「南海に向っている紀伊の熊野、殊にその那智の観音の祀ってあるところ」（「折口信

夫全集ノート編第十八巻』)、同じく紀伊の粉河寺(補陀落山施音寺、日本古典文学大系本)とするものがあり、また南インドの補陀落山そのものをさすとする説(新潮日本古典集成本)もある。

こうして諸説が行われているのだが、淡路島の四方の霊地を述べたこの歌の、わかりやすい北と東の霊地については、いずれもその方位が正確であること、しかも淡路島から数十キロ離れた、視界に入るほどの距離の場所が詠まれている点にまず留意しておきたい(略図1参照)。それは、地図の上ではかるのではなく、淡路島に身を置いてみた場合の人間大の感覚として自然な詠みぶりというべきであろう。西と南の霊地の比定についてもこの点を考慮すべきであり、すると、「南は南海補陀落の山」を南インドの補陀落山に求める説は勿論、紀伊の熊野に求めるのも問題がある。たしかに熊野は、梁塵秘抄の当時、いうまでもなく霊地として著名で、梁塵秘抄自体にも、

聖の住所はどこどこぞ
大峰葛城石の槌
箕面よ勝尾よ播磨の書写の山
南は熊野の那智新宮　(二九八)

などをはじめとして四首に歌われている。この歌には書写の山も詠まれ、「南は熊野の那智新宮」ともあって、先の歌の解釈にも参考となるが、しかし「南」というのは都から見たそれであって、先の歌の場合とは異なる。淡路島から見た「南」の、しかも視界に入る程度の「南海」にある「補陀落の山」とは、先の伊島を措いてほかにはあるまいと思う。方位も距離も適切で、しかも空也誄・日本往生極楽記・扶桑略記などによって伊島が観音の霊地であることはこの当時も知られていただろうからである。

なお、その他の、伊島をさすらしき古代文献の記述としては、卜部遠継が天長七年(八三〇)に撰した新撰亀相記のなかの、

次生二淡島(今在二阿波国以東海中一無レ有二人居一不レ入二子列一)

がある。「阿波国以東の海中」にある小島は、伊島こそふさわしい。仁徳記の、天皇が「淡道島に坐して、遙ろに望けまして」歌ったという歌謡、

おしてるや　難波の崎よ　出で立ちて　わが国見れば　淡島　おのごろ島　檳榔の島も見ゆ　放つ島見ゆ

中の「檳榔の島」「放つ島」について、大日本地名辞書には「此(伊島)に外ならじ」というが、なお未詳である。

思うに、伊島は古く湯の涌く島として信仰の対象となった土

地であったかもしれない。後に、観音信仰の隆盛とともに、阿波と紀伊の間にある南海の孤島という地理上の条件も作用して、その古い信仰の上に観音信仰が重なり、観音の霊地として像を祀り、修行時代の空也が訪ずれもし、またある時代には一つの補陀落ともみなされたのではなかったか。例によって伊島も近年は過疎化また近代化が進みつつあり、人々の信仰生活の上でもかつての活気は失われたようだが、しかし現在もなお島の信仰の中核をなしている観音への、また空也への信仰の根は意外に深いと思われるのである。

注

1　参考、三間重敏「「空也誄」の校訂及び調読と校訂に関する私見」（「南都仏教」四二、一九七九年）。浅野日出男・狩野充徳・福井佳夫・山崎誠「「空也誄」校勘並びに訳注」（「山陽女子短大研究紀要」一四、一九八八年）

2　平林盛得『聖と説話の史的研究』一四八頁（一九八一年）

3　岡田希雄「源為憲伝攷」（「国語と国文学」一九―一、一九四二年）

4　注2の書、一一五頁、一五四頁。

5　日本思想大系『往生伝　法華験記』所収の「日本往生極楽記」の頭註に「未詳」とあり、奈良弘元「空也の事績について」（鶴岡静夫編『古代寺院と仏教』所収、一九八九年）も「未詳」とする。また、堀一郎『空也』（一九六三年）や注1の「「空也誄」校勘並びに訳注」には「湯島」の比定についてとくにはふれない。

6　歌川学「空也と平安仏教」（「日本歴史」六一、一九五三年）

付記

挿入の略図は、岡田一郎『伊島風土記』（徳島県出版文化協会発行、全九四頁、一九七六年）所載の図をもとにして作成した。本書は唯一の伊島の地誌である。